

介護保険に対する家族介護者の満足度

○松岡 英子（信州大）

【目的】 2000年4月からスタートした介護保険制度の成否には大きな関心が寄せられており、制度導入によって在宅介護の状況が改善されるか否かが検証されなければならない。本研究は、要介護認定を受けた高齢者を介護している家族介護者の介護保険に対する満足度を明らかにし、満足度に影響を与えている社会的属性要因を探るとともに、介護意識や介護ストレスとの関係を分析することを目的とする。

【方法】 本研究で分析するデータは、長野県内に居住し、2000年4月の介護保険スタート時に要介護認定を受けた高齢者を介護者している者を対象とした調査から得られたものである。調査時期は2000年7月～8月であり、1450名を対象とした。回収数は1241、有効回答数は1163（80.2%）であった。

【結果】 介護保険満足度を「認定結果」「ケアマネージャー」「ケアプラン」「サービス内容」の4つの視点から捉えたところ、認定結果には27.2%が不満（不満・やや不満）をもっていたが、ケアマネージャー、ケアプラン、サービス内容には9割前後が満足（満足・やや満足）していた。限度額のサービスを利用しているのは30.6%しかおらず、限度額以下の利用が62.7%にも達していた。高齢者及び介護者の12の社会的属性要因について、4項目の加算尺度で捉えた介護保険満足度への影響を分析したところ、高齢者の属性では年齢と痴呆症状、介護者では続柄、介護量、健康状態の有意な影響がみられた。さらにこれらを独立変数とする分散共分散分析を行ったところ、介護量以外の4変数の有意な効果が確認された。また、介護継続意識が強いほど満足度が高かった。